

うわさ 社会的思考の表明

川根 慶子

(岡本ゼミ)

普段の生活の中で、うわさ話を聞いたり、話したりする機会は多い。たぶん、一生のうちに一度もうわさ話を聞いたり、話したりしない人などいないはずだ。食品の原材料に関する社会的なうわさから、身近な人に関する私的なうわさまで、実に幅広いうわさが存在している。うわさには、確かな証拠は存在しない。それにもかかわらず、私達は、うわさがあたかも本当であるかのように語り、信じる。時に、それは、大きなパニックを引き起こしたり、正しい判断や情報を妨害したりする。私達は、日常生活の中に溶け込んでいるうわさ話に「どうしてそんなことを言うのだろう？」と疑問を持ちたりはしない。

フランスの社会学者エドガール・モラン (Edgar Morin) は、「現在あるものの社会学」を確立しようとした (1969 = 1973)。それは、過去や未来ではなく、現在あるものを、今起こっているものを、その渦中で捉えようと試みるものである。モランは、うわさもその渦中で研究しようとした。研究結果として著書『オルレ안의うわさ』がある。その中で、モラン (1969 = 1973) は、うわさとは、人々の無意識下の神話 (うわさの素となる空想の物語) が現実の事物や人物に付着したものだと言明している。そして、神話についてこう述べている。「神話というものは、社会が分離したものを再び一緒にさせ、社会が禁じるものを実現させ、相互に矛盾したものを統一させるものなのだ」 (1969 = 1973 : 60)。つまり、神話は社会の営みの中で必要不可欠なものであり、生じない方がおかしいものといえる。普段、私達は、理性で行動している。理性の段階では、「言うてはいけない」とか、「そう思ってはいけない」と自分に禁じている。

しかし、そうやって押さえつけられた煮え切らない不安や恐怖が、心の底、無意識下に渦巻いている。その無意識の感情の表明が神話なのである。

万人が下意識に思っていることを神話という形で実現させる。神話では、タブーが許される。この神話が、現実の何かや人物に付着したとき、うわさとなる。だからこそ、この情報化社会の時代であっても、なお、うわさは大きな権力を持ち続けているのである。

うわさの研究は多々ある。その中で有名なのが先述の「オルレ안의うわさ」の研究である。「オルレ안의うわさ」は、その地特有のものとしてではなく、社会的なものとして、多角的に研究されている。本研究では、この「オルレ안의うわさ」の研究の仕方を参考に1つのうわさを取り上げて考察したい。

ここで取り上げるのは、日本でよく知られている「口裂け女」のうわさである。口が耳まで裂けた女性の妖怪の話である口裂け女のうわさは、2007年に映画化もされ (PG-12指定)、翌2008年に続編 (R-15指定) も公開された。「口裂け女」とは一体何なのか、という議論は当時からあった。そのため、主に小中学生の間でうわさとなったのだが、メディアでも頻繁に取り上げられ、当時の資料が多くある。また、近年でも、検証番組や本、ウェブページなどで取り上げられる。うわさが流れたのは、1978 (昭和53) 年末から1980 (昭和55) 年までであった。つまり、うわさが社会現象になってから30年近く経っても、なお、脚光を浴び続けていることになる。そんな口裂け女のうわさについて、「オルレ안의うわさ」を主軸にその他の先行研究も織り交ぜて参考にしながら、考察を加える。そして、口裂け女のうわさを通して、「うわさ」そのものについて考えたい。

1 口裂け女のうわさの概要

口裂け女のうわさは、1978 (昭和53) 年末から1980 (昭和55) 年まで、主に小中学生の間で広まった。しかし、事を大きくしたのはその母親達であ

る。うわさを子供から聞いて、信じた母親達の問い合わせの電話が警察に殺到し、全国でパニックを引き起した。まず、78年12月上旬、岐阜県美濃加茂市の加茂警察署に、口裂け女に関する問い合わせが相次いだ。同署は署員を動員して調べたが、問い合わせに符合する事実は確認できず、全てはデマだと宣言した。翌79年3月5日には、関西にもうわさが広まり始め、京都府の山科警察署の防犯課長が「あれはデマです」とテレビで話した⁽¹⁾。また、福島県郡山市や神奈川県平塚市では、パトカーの出動騒ぎがあった。このような警察の対応がマスコミの関心を引き、新聞や雑誌など各メディアで取り上げられた。そのため、うわさ自体は小中学生の間で広まったが、存在自体は、世代を問わず注目された。よく例話として取り上げられる話の型は次の通りである⁽²⁾。

「大きなマスクをした赤いコートの女が、通行人を呼び止め、『私を美人だと思うか』と聞く。『美人』と答えると家までついてくる。『ぶす』と答えると、マスクをはずし、耳まで裂けた口を開いてびっくりさせる」

うわさの発端は、78年12月初めに岐阜県加茂郡八百津町で流れた次のよううわさとされている⁽³⁾。

「農家の婆さんがある夜、母屋から少し離れた便所に用足しに出かけた。と、物陰に人が立っている。不審に思って近づくと、人影はパッと顔を向けた。耳まで口が裂けた女だ！婆さんは腰をぬかした」

この話が、様々に変形して、1ヶ月で岐阜県内全域に広まり、その後、ほぼ半年で全国に広まった。

口裂け女のうわさの注目すべきところは、メディアを媒体とせず、口コミだけで全国に広まったところにある。79年1月26日に初めて岐阜日日新聞が取り上げたが、このときには、すでに岐阜県全域と愛知県にまで広まっており、地元紙であるため、他県に広まるための媒体となったとは考えにくい。また、テレビやラジオもうわさが大々的に広まるまで取り上げていない。このような口裂け女のうわさが広まった場所は、教室や塾であった。閉ざされた空間で、子供達は口裂け女という空想の話を創造し、盛り上がったのである。そし

て、この話を信じた母親や教師達の言動がさらに空想の話に信憑性を持たせていった。母親達は警察に問い合わせ、教師達は「マスクをした人を見たら逃げましょう」などと注意した。特に、母親達が警察に問い合わせをしたことが、騒ぎを大きくしたと考えられる。そして、口裂け女のうわさがピークを迎えていたとき、次のような事件が起きた⁽⁴⁾。

79年6月21日の午前3時頃、兵庫県姫路市野里の閑静な住宅街。土砂降りの雨の中、1台のタクシーが通りかかった時、電柱の陰からライトに照らされ、「腰まで垂れる髪で顔を半分隠し、真っ赤な口が耳元まで裂け、白い長じゅばんをまとして出刃包丁を手にした女の姿」が浮かび出た。びっくりした運転手の110番通報で姫路署のパトカーが駆けつけ、ずぶ濡れのまま電信柱の陰に隠れていた1人の女性を発見、署へ連行した。彼女は現場近くに住むA子さん(25歳)。AさんはTVの怪談映画で見た雪女に魅せられ、さっそく自分もそれらしく装ってウツトリとしているところへ、たまたま友達のB子さん(23歳)がやってきた。このB子さんというのがお化けや幽霊に人一倍興味があり、Aさんの恰好を見て「雪女なんて古いわ。今やったらもう何というたかて口裂け女よ」とアドバイスした。たちまちその気になったAさんの口から耳へ口紅を赤々と引いてやり、出来上りのリアルさに2人で驚いたついでに、行きつけのお好み焼き屋のおっさんを「びっくりさせたる」と外へ出、タクシードライバーと遭遇したという次第だった。Aさんは、持っていた包丁が銃刀法違反にあたるとして書類送検された。

この事件を境にして、口裂け女のうわさは笑い話の類が多くなった⁽⁵⁾が、うわさが消えることはなかった。それは、マスコミの影響によると考えられる。うわさがピークを迎えていた6月から各メディアが一斉に口裂け女のうわさを取り上げ始めたからである。そのため、うわさは80年まで続いた。その後、うわさが消失しても、口裂け女への人々の関心は消えることはなく、本やテレビ番組、ウェブページなどで取り上げられ続けている。そして、怪談話の1つとして、アニメなどに登場する。00年にあるテレビ局の子供向けアニメが口裂け女を扱う予定だったが、「口唇口蓋裂病」⁽⁶⁾の

子供を持つ親達の団体の抗議を受けて、放送中止になったことがある⁽⁷⁾。最近では、07年に映画化され (PG-12指定)、翌08年に続編 (R-15指定) が公開された。

2 うわさの分類

口裂け女のうわさを分析する前に、まず、うわさそのものについてまとめておく。

うわさは、その性質から3つに分類される。まず、1つ目は「社会情報としてのうわさ」。一般的に「流言」と呼ばれる。たとえば、関東大震災直後に流れた「朝鮮人襲撃」のうわさがこの分類に入る。当時、震災によって、情報の途絶による空白と混乱が人々を襲っていた。毎日、見聞きする新聞やテレビなどの情報網が途絶えていたのだ。事態を説明するいかなる報道も与えられない中、様々なうわさが飛び交っていた⁽⁸⁾。その中で、災害に乗じて朝鮮人が集団で日本人を襲ったりするといったうわさが流れた。これにより、自警団が形成され、数千人もの朝鮮人が虐殺された。震災によって今までの生活環境が一変し、自分の存在証明が危うくなったことがこのようなうわさを生んだとされている⁽⁹⁾。住所も職場も学校もなくなり、自分と他人を区別するものがないのである。私が誰であるかを証明するものがなく、外の世界と自分達の今の世界を繋いだり、今の状況を説明したりする情報が一切入ってこない。このような状況下で日本人という人種にしがみ付き、外国人という排除すべき他者を生み出したのである。自分達とは異なる言語、常識、そのような違いで、排除すべき他者であると判断した。もちろんそこにはかねてからあった朝鮮人に対する偏見がなかったとはいえない。しかし、このように社会的な事件などの出来事による危機状況下にいる人々の間を情報が欠乏している場合に流れるうわさが「社会情報としてのうわさ = 流言」である。

2つ目に「おしゃべりとしてのうわさ」がある。これは、「知ってる？ A先輩とB先輩が別れたって話。この前ね……」などのような身近な人に関する出来事をおしゃべりの材料として交わすものである。一般的に「ゴシップ」と呼ばれる。ゴシップは1つ目の流言が不特定多数の人々の間を流れるのに対して、ある程度親しい人々の間しか流れ

ない。そして、内容も、流言が社会的な出来事に関するものであるのに対し、ゴシップは「人」に関わる出来事が中心となる。では、ゴシップとおしゃべりはどう違うのか。まず、ゴシップの特徴として、話の対象となる人物の不在が挙げられる。次に、話の対象となる人物をお互いに知っているということ。そして、ゴシップの受け手が、当人の家族など、当人と極親しい人ではないこと。これは、ゴシップの内容が当人に知られては困るからである。つまり、ゴシップの受け手は仲間として認められているということになる。そして、価値観の共有が求められる。ゴシップの対象になっている人物に対する意識がゴシップを共有するグループの中で一致しているのである。

3つ目は「楽しみとしてのうわさ」である。一般的に「都市伝説」と呼ばれる。たとえば、「オルレアンのうわさ」がこの分類に入る。1969年にフランスのオルレアンで、あるうわさが流れた。それは、特定のユダヤ人の婦人服店で女性誘拐が秘密裏にされているといったものがある。このうわさの主要なテーマは、若い女性が試着室で毒物を注射されて行方不明になり、どこか外国に人身売買されるといったものである。このうわさは、その後、細かい部分が変わられ、日本を含む様々な国で語られた。このように、主要なテーマは共通しているが、細かい部分は変えられ、繰り返し語られるのが都市伝説の特徴の1つである。そして、本研究のテーマである口裂け女のうわさも、この3つ目の分類に入る。

しかし、1つのうわさには、以上の3つの要素が全て絡み合っており、厳密にははっきりと分けることは難しい。つまり、うわさには以上の3つの特徴があるともいえる。

3 うわさの広まりについて

うわさがなぜ広まるのかについては、G.W.オールポート (G.W.Allport) とL.ポストマン (L.Postman) が示した公式がある (Rosnow and Fine 1976 = 1982 : 87)。

「 $R \sim I \times A$ (ある事柄についての流言 (Rumor) は、集団成員の生活でその事柄が持つ重要性 (Importance) とあいまいさ (Ambiguity) に比例して、その集団の中で広がっていく)」

つまり、「重要さ」と「あいまいさ」のいずれかがゼロであった場合は、うわさは流布しないということになる。水口禮治 (1992 : 52-53) によれば、「重要さ」とは魅力のことであり、主観的効用性 (subjective utility) のことである。これが高くなるのは、他人の欠点、不幸、利害、人事、危機、緊迫に関係する場合である。また、重要性は欲求の剥奪や緊張感と深く関わっており、物や情報の不足はその物や情報に対する必要度が高まるため、当然関心も高まり、重要になる。「あいまいさ」とは、情報不足、意味不明、内容複雑、通信手段不備などである。

A.コーラス (A.Chorus) によると、オールポートとポストマンの公式にひとつの変数として批判的感受性の限界の逆数が加えられる (Rosnow and Fine 1976 = 1982 : 87)。

「流布量 (R) ~ 重要さ (I) × あいまいさ (A) × 批判的感受性 (1/C)」

つまり、批判的感受性が増大すればどんなことにも批判的に拒否するため、流言は弱くなり、ついには消失する。しかし、批判的感受性が低くなればどんなことでも無批判に受け入れられるため、流言の伝え手になりやすい。つまり、この公式の R は、聞いたうわさを人に伝える可能性ということになり、うわさの語り手にスポットを当てている。

一方で、水口 (1992 : 53) は、流布量にはオールポートとポストマンの公式の個人的変数の他に、社会的変数も作用するため、以下のような式になると述べている。

「流布量 (R) ~ 重要さ (I) × あいまいさ (A) × 集団としての緊張力 (1/C) × (社会的緊張 (St) × 定数 (k))」

しかし、実証的な研究のレベルでは、「あいまいさ」についてのみ支持が与えられていて、重要性については必ずしも支持されていない。R.L.ロスノウ (R.L.Rosnow) は、うわさを伝達させる要因として、「あいまいさ」と「不安 (Anxiety)」を挙げている。このロスノウの考え方を川上善郎 (1997 : 49) が以下のように定式化して示している。

「流布量 (R) ~ あいまいさ (A) × 不安 (A)」

以上の公式はいずれも「社会情報としてのうわ

さ = 流言」を説明するものであり、これらの公式に関する実験も同様である。つまり、「楽しみとしてのうわさ = 都市伝説」に関しては、また別の観点からの分析も必要となる。それは、「都市伝説」の特徴であるうわさに隠されたテーマである。

4 オルレアンと朝鮮人来襲のうわさ

そこで、様々な観点から観察、分析がなされた「オルレアンのうわさ」の研究が参考になる。

1969年5月にフランスのオルレアンで突然生まれ広まったうわさがある。ある婦人服店で若い女性が洋服を試しに試着室に入ると、薬物を打たれる。こうして気を失っている間に街の地下通路を通過してどこか外国に連れて行かれる。このようなうわさを信じた人々が名指された店の前で群れを作ったり、嫌がらせの電話をしたりした。そして、このような女性誘拐を行っていると言われた店は全てユダヤ人の経営する店であった。このうわさには、その後、他の地域や国でも語られていることから、一般的なテーマ、無意識の普遍的なテーマが含まれている。それゆえ「人種差別」のうわさとして社会問題になったが、「都市伝説」の分類に入るのである。

「オルレアンのうわさ」の主要素は「試着室」と「誘拐」である。そこに隠された無意識の普遍的なテーマを順に見ていく。まず、「試着室」がエロティシズムの象徴であり、「誘拐」へと?がっていく。「試着室」の中では、好きな服を自由に着て、全身が映る鏡でポーズを取ってみたりして、自分を演出できる。普段とは違う自分、そして普段とは違う遠い世界へ行きたいという欲求と結びつき、「旅」の象徴となる「誘拐」へと結びつく。自分の意思とは別に薬によって、他人によって連れて行かれる。そのため、このことが発覚しても自分は咎められない。だから「誘拐」なのである。この神話は、町中でひそかに語られていた。オルレアンだけではなく、フランスのあちこちで囁かれていたのである。この神話が特定の場所や人物に付着してうわさとなった原因は、思春期の女学生達によるおしゃべりであった。思春期の女の子は性に関する興味や不安を抱いている。しかし、大人や社会は、性に関することに規制を掛けてくる。興味や不安と規制の間で、彼女達は、それを

神話で実現させ、みんなとワイワイ話すことで発散させていたのだ。また、学校というのは、社会から分離されている。それゆえ、現実離れた空想の話が生まれやすい環境であるといえる。

では、なぜこの神話がユダヤ人商人の上に付着したのか。実は、うわさを語っている本人達は、このうわさが反ユダヤ的なものだとはいさし思っていない。この誘拐を行う者は、語る人々によって変わる。オルレアンで名指しされた店はどこも？盛っていた。安くて新しいファッションの服を取り扱っていて、若い女性達に人気があった。そこに人々の空想が入り込む。「あんなに安くて、なぜ儲かっているのか。きっと裏で何かしているに違いない」。また、名指しされた商人達は、反ユダヤ主義に抱かれていたイメージとはまったく異なっており、地元民に溶け込んでいた。そこに下意識にあった反ユダヤ主義の感情が「本当に誠実な商人なのだろうか」という疑問を抱かせる。「あの仮面の裏には……」と、反ユダヤ主義的イメージが想像されるのである。

そして、このよううわさが急速に街中、老若男女を問わずに広まった理由は、女性の解放と現代都市の要素が関わっている。うわさが流れていた当時、オルレアンは首都パリに近いということもあり、急速に変貌していた。このような中で、少女や若い女性の社会慣習が現代的に変化し、大人達や伝統的な慣習と対立していた。それゆえ、新しいファッションの服を売る店は、伝統に忠実な人や母親達の反感を買う。新しいファッションの服は、現代的な女性になるためのアイテムであり、それを売る店は、女性解放を象徴する場所なのである。このような、ファッションに関する世代間の溝は深まる一方だが、女性誘拐という恐怖は、世代間の溝を埋める。教師や母親達は、思春期の少女とそれまで世代間の溝によって阻まれていた接触を回復することができる。そして、教訓や説教の題材とすることで、自分達の権威を取り戻せるのである。実際、名指しされた店に行かないようにと注意した教師や親はいた。このうわさの渦中において、空想の敵と戦っている間、教師や親と少女達は、強く連結していたのである。

また、現代化はオルレアンの人々に空虚感と不安を生じさせていた。匿名の人々からなる都市へ

と変化し、伝統が崩壊していく。しかし、パリのような都市ではなく、やはり地方都市の雰囲気は残っており、くさくさする。その伝統が崩壊した空白を埋めるものも未だなく、空虚感が人々を襲う。その空虚感が不安を掻き立てる。自分の存在証明が危うくなるのである。これは、日本の関東大震災時に流れた「朝鮮人襲撃」のうわさと共通する。都市は匿名の人々からなる。地方都市の雰囲気が残る中での伝統の崩壊、自分達の価値観の崩壊と地元民だけではない匿名化への変化。アイデンティティが危うくなり、その不安から他者を排除し始めるのである。自分達のアイデンティティを守るためにちょっとした違いに敏感になる。それが、現代化の象徴である流行の婦人服店に、そして店主である自分達とは人種の異なるユダヤ人に向けられた。無意識の感情の表明である神話は、潜在的な偏見と結びつく。自分達と一見すると何にも変わらない、自分達の中にも何にも違和感のない人物、つまり、普段の生活の中では、差異を意識することはないが、潜在的に感じている決して変えることのできない明らかな違いのある人物に神話は付着するのである。「朝鮮人襲撃」のうわさが西洋人を標的にしなかったのは、このためである。

5 口裂け女のうわさの構造

ここから、先行研究を踏まえて、口裂け女のうわさを分析していく。まずは、口裂け女のうわさの主要なテーマを見ていく。

5.1 口裂け女の主要なテーマ

口裂け女のうわさのテーマを探るため、2つの話の型を取り上げる。それは、最も有力視されている話の原型と初めてマスメディアが取り上げた当時のうわさである。

まず、話の原型とされているのは、発信源とされている岐阜県加茂郡八百津町で78年12月初めに流れた次のよううわさである。

「農家の婆さんがある夜、母屋から少し離れた便所に用足しに出かけた。と、物陰に人が立っている。不審に思って近づくと、人影はパッと顔を向けた。耳まで口が裂けた女だ！婆さんは腰をぬかした」

一方、初めてマスメディアに取り上げられた当時のうわさは次の通りであった（『岐阜日日新聞』1979.1.26朝刊）。

「深夜、道を歩いていると、後ろから肩をたたく美人がいるという。道でも尋ねるのかと振り返ると、マスクをはめていたのをやにわに外し、大きく裂けた口を見せて驚かす。中年の美人で目元が山本陽子にそっくりだという」

朝倉喬司（1989：137）は、最後の「中年の美人で目元が山本陽子にそっくり」というのは、78年12月28日に起こった俳優・田宮二郎の猟銃自殺事件と関連して後から付着したものと指摘している。死んだ田宮の愛人と目された女優・山本陽子が、この頃、芸能ジャーナリズムの取材攻勢をかわして行方をくらませていた。そうした山本についての好奇心のおしゃべりが、いつの間にか口裂け女の話と混線してしまったというのである。この朝倉の分析を踏まえると、マスクをはめていたり、中年の美人で目元が山本陽子にそっくりという部分は事件に関連して変形したものと考えられる。

以上のことから、「口裂け女」の主要なテーマは、「女性の口が裂けている」ということになる。では、「女性の口が裂けている」ということにどのような意味があるのだろうか。

5.2 母親説

当時、秋山さと子（お茶の水女子大講師・児童心理学）が『週刊朝日』（1979年6-29号）で母親説を述べている。内容は次のようなものである。母親には「飲み込む」と「育てる」の2つの相反したイメージがある。鬼子母神が初めは他人の子を取って食べていたが、自分の子を取られ、お釈迦様に諭されて、全ての子を育てる神になったように、すごく大きな口というのは、飲まれてしまうというイメージがある。母親が子供を可愛がり、思いやめることは自然なことだが、行き過ぎたりすると子離れ親離れできなくなる。母親が、子供の全てに干渉してしまうと、子供はそこから抜け出せない。母親の価値観にがんじがらめになってしまうことは、母親に飲み込まれてしまうようなものである。過保護で可愛がり過ぎの母親の持つそんな否定的な面に無意識的に攻撃性を感じていた

全国の子供達が、年上の女の人が迫ってくるという話にピンときて、もう会ったような気分になった。子供達は母親に甘えなくては生きていけないが、その怖さも知っている。

つまり、口裂け女は母親に対する「甘えたい」けど「怖い」という矛盾した2つの感情のうちの「怖い」という負の感情の表れであると考えられる。この負の感情は、時には母親に対する反発心になるだろう。しかし、この反発心を母親にぶつけることはできない。母親への反抗や否定的な感情は母親に突き放される可能性があるため、自分に禁じてしまう。それは、全てを依存している子供にとって「恐怖」であり、阻止したい。また、一般的に親への反抗や否定的な感情は社会で禁じられている。そのため、母親に対して2つの矛盾する感情を抱いて日常生活を送らざるをえない。そのようにして生きることがしんどいため、母親に対する否定的な面を口裂け女として現実の母親から切り離すのである。現実の母親は自分の行動に干渉したりせず、どんな自分でも受け入れ、愛してくれる、安心して甘えていられる母親。一方で、自分を飲み込んでしまうかもしれない恐怖の母親は、口裂け女なのである。口裂け女なら、怖いなどと言って自分達の生活から排除できる。そして、この口裂け女に対する感情は他の同世代の子と共有することができる。このように口裂け女に感情をぶつけることで、現実の母親との関係に何の亀裂も生じさせずに良い子のままで、いい家族のままで無難に過ごすことができるのである。

5.3 時間帯

また、現れる時間帯は午前1時頃である(10)。この時間帯は、子供にとって未知の世界といえる。たいていの子供は、家で眠っているだろう。親に守られている安心感の中で、夢の世界にいる時間帯。そして、その安心という家の外、暗闇の中には恐怖がある。親の保護の世界から抜け出そうとしている思春期前後の子供達が無意識下に感じている不安。知らない世界に対する好奇心が、深夜という時間帯に現れている。つまり、口裂け女は、未知の世界の恐怖と不安の象徴でもあるといえる。では、なぜ口裂け女は未知の世界の深夜から、日常の下校時間に時間帯をずらして、現れるように

なったのだろうか。

それは、母親達によって時間をずらされたと考えることができる。この深夜の時間帯に現れるとうわさされていた頃から、警察に問い合わせが相次いでいた。母親達は、子供が自分から自立したがついているのを感じている。赤ん坊のとき、子供は母親と一心同体、母親の価値観そのものであるが、成長するにつれ、自我が芽生え始める。それにより、子供は、母親の価値観から抜け出そうと母親に歯向かうようになる。しかし、母親としては、いつまでも自分の価値観で縛っておきたい。「愛している」からこそ、干渉したいけど、子供がそれを許さず、拒否され、対立する。そのため、「不安」や「苛立ち」を感じる。我が子を思う気持ち子供に拒否されていることを受け入れたくはない。子離れしたくない。そして、一般的に子離れできないことは社会で禁じられている。だから、子供と一緒に口裂け女の神話を実現させたのである。自分は子供に受け入れられている。子供から拒否されているのは口裂け女なのである。母親達は、子供と一緒に自分達の否定的な面を口裂け女として現実から切り離し、排除することで、自分達を肯定したのである。

そして、口裂け女は、深夜という未知の世界から、下校時間という現実の世界に現れるようになる。子供とともに口裂け女について騒いでいる間、母親は子供と連帯感を感じることができる。普段は話が合わなくても、親の言うことを聞かなくても、この時だけは、親のもとに子供は寄ってくる。そして、母親は、自分の権威を取り戻せ、自分の責任の及ぶ範囲で、子を守ろうと働きかける。

このような連帯感をもたらすために口裂け女は全国を駆け巡る。では、なぜ、この時代であったのか。

6 1970年代後半

次に、うわさの渦中にいた小中学生とその母親達が当時どのような状況下にあったのかを見ていく。

6.1 教育

76年12月に児童権利宣言20周年に当たる79年を国際児童年とすることが第31回国連総会で決まった。そのため、翌77年から社会の関心が子供の教

育に向けられていった。

文部省（現文部科学省）は77年7月23日、新しい小中学校教育のあり方を示した新学習指導要領を告示した。小学4年以上と中学では授業日数を減らし、年間授業日数にも弾力性を持たせる、

教育内容を基礎的、基本的な事項を中心にしほり、授業時間数を全体で20%から50%減らす、指導要領での細かい記述は避け、地域、学校での創意工夫の余地を増やす、などと「ゆとりある学校教育」を強調。と同時に「君が代」を国歌と規定し、以後、激しい議論を呼んだ。（朝日新聞社編 2000：1977-12）

新学習指導要領案は翌78年から実施され、この年の末に口裂け女のうわさが流れ始める。

そして、子供の自殺にも関心が向けられた。子供の自殺の理由として挙げられるのは、まず学業問題である⁽¹¹⁾。

文部省が77年3月に初の学習塾実態調査結果を発表した。それによると、小中学生の5人に1人（20.2%）、約310万人が学習塾に通っている、

特に中学3年生は38%、都市部では、中学生はほぼ2人に1人という結果が出ている⁽¹²⁾。

そして、国際児童年である79年1月から、各新聞社は子供に関するコラム欄を作る。読売新聞は、シリーズ「子どもたちは今…」を開始。毎日新聞も、シリーズ「親と子79 家庭」を開始。この他にも、子供に関するコラム欄がたくさん編集された。

児童生徒の自殺者増加が大きな社会問題になっ

表1 小・中・高生の自殺者の推移

(単位：人)

| | 総数 | 小学生 | 中学生 | 高校生 |
|-------|-----|-----|-----|-----|
| 1974年 | 277 | - | 69 | 208 |
| 1975年 | 290 | - | 79 | 211 |
| 1976年 | 288 | - | 72 | 216 |
| 1977年 | 321 | 10 | 89 | 222 |
| 1978年 | 335 | 9 | 91 | 235 |
| 1979年 | 380 | 11 | 104 | 265 |
| 1980年 | 233 | 10 | 59 | 164 |
| 1981年 | 228 | 8 | 74 | 146 |
| 1982年 | 199 | 8 | 62 | 129 |
| 1983年 | 237 | 6 | 83 | 148 |

資料：文部科学省「児童生徒の自殺の状況」1974-1983年の統計データより作成

注) 1. 上表は、各都道府県教育委員会で把握しているデータを集計したものである。

2. 小学生の自殺については、1977年より調査。

たことを受けて、文部省は、79年2月に自殺防止対策を各都道府県と各教育委員会に指示した。

確かに、自殺者は増えているのだが、76年までの小学生のデータがない(表1参照)。これは、小学生の自殺に関心を持ち始めたのが77年からであり、社会の関心が自殺者増加の要因の1つとなっていることを物語っている。

そして、少年非行や校内暴力にも関心が寄せられた。『完全版』朝日クロニクル20世紀』(2000: 1978-35)によると、以下のようなデータがある。

『少年非行の実態1978年版』(警視庁)によると、少年非行は戦後第3のピークを迎え、刑法犯少年は12万2238人、人口比で戦後最高を記録したと発表している。受験競争の激化に伴う“落ちこぼれ”層の増大、家庭や地域社会の教育力の低下などが影響しているとされた。特に78年は、少年による殺人事件が相次ぎ、1年間で、殺人で検挙された10代前半の少年は12人を数えた。

一方、校内暴力は中学・高校で頻発し、部員の暴力沙汰による夏の甲子園高校野球の予選出場停止や自発的辞退が18校にも達した。

以上のようなデータがあり、社会も当時、非常に騒いでいたのであるが、肝心の小中学生(中学生は前半)に関しては、口裂け女の時代よりも、うわさが消失した後、80年からの方が暴行などの犯罪が増えている(表2参照)。このことから、口裂け女によってストレスを発散させていたと読めるかもしれない。親や社会に対する反抗や不安

を口裂け女にぶつけることで、日常生活に適応してきたが、うわさがなくなったことによって、暴力などで現実世界に直接ぶつけざるをえなくなった。これは、内に向かっていたストレス(自殺行為も含む)を他者という現実世界にぶつける手段を見つけたため、うわさがなくなったとも考えられる。

6.2 家庭⁽¹⁴⁾

同じ家に住んでいながら、子供が何を考え、何をしているのかを親が知らない、あるいは知ることができないでいる状態をいう「二階の息子、離れの娘」という言葉が教師の間で広まっていた。79年2月に中学生の自宅で同級生数人が争い、1人が死亡する事件が起きたことがきっかけで、一般にも知られるようになった。

6.3 生活環境

1970年代後半は、人々の生活が変化した時代である。

まず、人々の意識の変化が挙げられる。自分の生活が「世間並み」だと意識するようになったのである。その原因は消費の均質化である。この時代になると「三種の神器」(テレビ、電気洗濯機、電気冷蔵庫)がどの家庭にも揃うようになった。これは、同時に家事労働の軽減に繋がる。つまり、それまで家事にほぼ丸一日費やしていた母親達に自由な時間ができるようになったのである。その分、母親達の関心が子育てに向かいやすくなった。

次に、生活環境の変化が挙げられる。郊外化が進んだのである。郊外とは、「都市地域を中心として広がる都市圏の周辺部の住宅地域をいう。そして、郊外化とは、郊外への人口移動のことをいう」(西沢 2000: 207)。つまり、郊外化すると昼間人口と夜間人口が都市と郊外でシーソーのように変化する。昼間は、郊外から通勤してくる「サラリーマン」によって都市の人口が増加し、郊外が減少。夜間は逆転する。郊外では、職住が分離しているのである。また、性別分業が貫徹される。都市に働きに出る「サラリーマン」を郊外にいる「主婦」が支える。この「理想的な家庭の中で、子供達もまた、役割を演じさせられる。父親の働いている姿を見ることはない。そして、普段生活

表2 触法少年数の推移

(単位:人)

| | 殺人 | 強盗 | 放火 | 強姦 | 暴行 |
|-------|----|----|-----|----|-----|
| 1974年 | 0 | 9 | 244 | 34 | 364 |
| 1975年 | 3 | 18 | 262 | 22 | 431 |
| 1976年 | 1 | 22 | 277 | 25 | 533 |
| 1977年 | 2 | 15 | 318 | 27 | 373 |
| 1978年 | 5 | 25 | 304 | 15 | 482 |
| 1979年 | 5 | 14 | 347 | 20 | 426 |
| 1980年 | 4 | 27 | 312 | 26 | 548 |
| 1981年 | 1 | 59 | 298 | 20 | 986 |
| 1982年 | 2 | 73 | 363 | 27 | 907 |
| 1983年 | 0 | 68 | 212 | 27 | 925 |

資料: 少年犯罪統計データ「触法少年(13歳以下)の主要罪名別人数」より作成

注) 1. 少年犯罪統計データは、警察庁「犯罪統計書」による。
2. 触法少年とは、刑罰法令に触れるような行為を行った少年(19歳以下)のうち、刑事責任を問われない13歳以下の少年のことをいう⁽¹⁵⁾。

している空間は、母子だけ。学校の枠を超えて、現実から分離した空間ともいえる。このような閉ざされた空間で母親の関心が一心に子供に向けられる。そして、子供の安全や地域を牛耳るのは母親達なのである。消費の均質化によって、他の家との差別化が図りにくくなったことにより、子供にその目が向けられる。「Aさん家の娘さんあの有名な私学に行っているのよ」や「Bさん家の息子さん成績優秀でこの前のテスト1位だったのよ」などというように子供の教育がその家の評価になる。また、この時代、学歴が重視されていた。いい大学に入ればいい職に就ける。リストラやサラ金⁽¹⁵⁾に悩まされる親世代にとって、「大学を出ていれば」「もっといい大学に行けていれば」という後悔が尽きない。我が子にはいい人生を送ってほしい。期待が大きくなる。

このような閉ざされた空間で子供という役割を担って生きていくのはしんどい。行き詰まりが生じてくる。しかし、閉ざされているためにストレスをどこに持っていけばいいのかわからない。行き場のないストレスは閉じ込められた場所で暴れるしかなくなるのではないか。それが、校内暴力、家庭内暴力へと繋がっていったと考えることができる。そして、力では大人に敵わない小中学生は、行き場のないストレスを口裂け女で発散させていたのではないだろうか。

母子だけの閉ざされた空間で行き詰まりを感じるのは、子供だけではない。母親も同じである。どんなに可愛い我が子でも、育児に費やす時間が長くなれば、ノイローゼになったり、苛立ちを覚えたりする。家にいるのは自分と子供だけのため、育児の責任を1人で抱え込んでしまい、子供と程よい距離感が保てない。干渉しすぎて、子供と対立したり、どう接していいのかわからず、距離ができたりする。このような育児環境の変化による不安から、母親達は子供の騒ぐこと（うわさ）に過剰に反応してしまったのではないだろうか。

また、郊外化は、同じ地域に誰が住んでいるのかわからない匿名化の要素も含んでいる。そのため、見ず知らずの他者への不安・恐怖を全ての人を抱えている。子供達が口裂け女という不審者のうわさをしていけば、不安になってもおかしくはない。このような生活環境の変化による子供との密接な

距離感と不審者への不安・恐怖が母親達にうわさに対して過剰反応を引き起こさせたのではないだろうか。

6.4 社会情勢

70年代後半、73年「石油危機」以降の不況から、負債を苦に自殺する人が多く、借金による一家心中も各地で起こった。そのため、社会問題となり、78年10月警察庁が「サラ金」をめぐる初の実態調査の結果を発表した。それによると、78年1月から8月の「サラ金」による自殺者は130人、家出人は1502人であった⁽¹⁶⁾。

6.5 流行

高山英男が「乱塾時代と“たいやきくん”」という流行に関する記事を書いている。以下、記事の要約である。

76年、石油ショック後の不況は深刻化して、企業倒産は戦後最高を記録した。この頃から、子供達の受験競争は急激に激化し、進学教室などの受験産業が活況を呈し、マスコミ上では「偏差値」「落ちこぼれ」「乱塾時代」などという言葉が流行して、子供達の日常を息苦しいものにしていった。

この年の初頭に、「およげ！たいやきくん」という子供の歌が爆発的にヒットし、“たいやきくんブーム”という特異な社会現象を巻き起こした。従来のヒットソングの起爆層が若年層であったのに対して、この「たいやきくん」のヒットをリードしたのは、子供とその父親である。（朝日新聞社編 2000：1976-35）

歌詞は、毎日鉄板の上で焼かれることに嫌気が差した1つのたいやきが海に冒険に出るストーリーである。高山は、「不況と受験競争の深刻化の中で抑圧された父と子は、このナンセンスソングを合唱して、一瞬、心理的に解放されたのである」と記事を締めくくっている。

7 うわさの多様性

7.1 オルレアンのうわさ 日本バージョン⁽¹⁷⁾

オルレアンのうわさが、オルレアン以外でも報告されている。フランス内部では、アミアン、ルーアンなど。しかし、全域ではない。そして、他の国でも報告されており、先ほども述べたとおり、日本も含まれる。もちろん細部は異なる。細部が

異なるのは、語り手・受け手が異なるからである。日本人にユダヤ人と言っても、ピンとこないであろう。日本でのオルレアンとうわさは次のような話になる。

「ある有名代議士の娘さんが、パリのブティックに入った。試着室に入ると、それが回転して、娘はいなくなった。秘密裏に捜すと、香港の売春宿で手足を切られて売春婦になっていた。この話がおおっぴらにならないのは、父である国会議員がもみ消しているからだ」

もちろんこの話も、口裂け女同様のいろいろなパターンがある。失踪地は、オーストラリア、南フランスなど、どこかの国。しかし、香港をはじめとする東南アジア近辺に収斂されていく。発見される地点も東南アジア近辺のどこかの国、そして、そのほとんどが香港になる。

また、失踪する女性も「OL」「留学生」など様々だが、「若い」ということは一貫しており、さらわれた日本女性の多くは、手足を切られて「だるま」姿で見世物になる。この落ちは日本バージョンの大きな特徴である。日本においても晒し者にされることは伝統的な見せしめ刑であった。このうわさは、教師や親など保護者的な立場にある者が海外旅行に魅了されている若い女性に警告として語ることが多かった。また、添乗員が学生ツアーで語ることもあった。つまり、最後の落ちは、羽を伸ばしすぎると痛い目にあうという警告なのである。同時に、そこには、若い女性が保護監督の目が行き届かないところで遊ぶという新たな傾向への社会の無意識的不快感情も含まれている。

また、懲罰の場所として東南アジア近辺が多いのは、日本における南に対するイメージが疫病や秘密の犯罪組織などの見えない汚辱の脅威として捉える傾向があるからである。

つまり、「主要なテーマ＝神話」以外の語り手によって変化する「細かいディテール＝神話が付着したもの」こそが、その社会の真の問題を示しているといえる。主要なテーマは神話の実現された時点で、その役割を終えている。問題は、その神話が現実の何と結びついてうわさとなったかである。そこに、うわさしている社会の思考が表明されている。そこで、口裂け女に関しても、各地で異なる細部をまとめた⁽¹⁸⁾。

7.2 口裂け女の細部

7.2.1 本人の特徴

美人／髪が長い／赤いコート（またはマント）を着ている／赤い帽子をかぶっている／四つん這いで走る（石川）／（白い）大きなマスクをしている／爪を赤く染めている／ブス／顔が長い／青白い顔／厚化粧をしている／目が大きい／黒いワンピースを着ている／サングラスを掛けている／ハンドバックの陰に鎌を隠している／編み物棒を持っている／口を手で押さえている／赤い頭巾／「パンタロン」または「黒いベール」をまとっている（東京）。

7.2.2 話すこと

優しい声で話しかける／「あたしきれい？」／「私を美人だと思うか？」／「私見たい？」／「私の目はきれいか？」（徳島）／手に持った写真と比べて「どっちが美人？」（神奈川）。

7.2.3 行動

・尋ねられて「きれいだよ」と答えた場合：

a. それで満足してしまう、b. 家までついてくる、c. 「これでもきれい？」とマスクを取って裂けた口を見せる。

・尋ねられて「きれいじゃない」あるいは「ブス」と答えた場合：

マスクを取って裂けた口を見せ、a. 驚かすだけで何もしない、c. 怒って顔や口を切り裂く／剃刀で斬る／ナイフで斬る（あるいは殺す、さらには食べる）、c. 逃げようとするとき追いかけてくる（100メートルを5秒（あるいは6秒、12秒）で走る、白パイより速く走る、学校時代陸上部だったのでとても速い、オートバイで追いかける）／鎌（または編み物棒、ナイフ、包丁）を持って追いかける。

べっ甲飴が好き／雨の日、電柱の陰に隠れて小学生を脅す／お金を取る／赤いセリカに乗って現れる（山梨）／ツゲの櫛を持って現れる（岡山）。

7.2.4 境遇

交通事故にあって手術に失敗／浮浪者／精神科病院から来る／日本中を旅行している。

・2人姉妹・双子型

a. 1人は生まれつき口が裂けていた。もう1人は交通事故で裂けた。

b. 双子の女の子が揃って整形手術を受けたが、

1人は手術に失敗してしまっただけで、彼女がもう1人をねたんだ末、気が変になり、街に出没し始めた。

・3人姉妹型

a. 3人姉妹が揃って美容整形手術を受けたが、3人とも手術は失敗、口が耳まで裂けた。3人は気がおかしくなって精神病院に入院。そのうち一番ひどい顔になった1人が病院を脱走して、通りがかりの子供をマスク姿で脅かし始めた。

b. 長女は整形手術に失敗、次女が交通事故で、ともに口が裂ける。それが原因で三女は狂気を発し、自分で口を裂いて精神病院に入るが、そこを抜け出す。(神奈川)

c. 3人姉妹の末っ子が上2人に比べて可愛かったため、姉達があんなで口を裂いた。末娘は精神病院に入ったが、脱走した。(山口)

d. 3人いたうち、2人は捕まって、1人だけになった(岐阜)。

7.2.5 場所

駅前/公園/学校/ごみ焼却場/ロッテリアの前/マクドナルドの前/山の中。

7.2.6 防御または撃退法

ポマードと叫ぶ/ポマードと3回叫ぶ/ベッ甲飴をあげる/にんにく、にんにくと唱える右肩を叩かれたら左から(左肩は右から)振り返ると殺されない(岡山)/手にポマードと書いて見せる(茨城)/手に犬と書いて見せる/はっきり答えないで「まあまあですよ」と、あいまいに答える/レコード屋か化粧品屋に飛び込む(東京)/ギャーと叫んでこちらが逃げれば、口裂け女も恥ずかしそうに逃げる(東京)。

7.2.7 番外編

問答のあと、手で口を裂く“口裂き”女に変貌(徳島, 群馬)。

口裂け女の話をも3人に伝えないとたたきがある(愛媛, 和歌山)。

ヤクルトおばさんがうわさを広めた(秋田)。

以上のような特徴が様々に組み合わせたり、何通りもの口裂け女が創造されたのである。あまりにも多いため、1つひとつ分析はしない。しかし、ここで、口裂け女という悪役の担い手が精神を病んだ女性であること、口が裂けていることが美人の条件から除外される要因となっていることに注

意しておきたい。

7.3 対抗神話

「うわさを抑止していく対抗神話は、告訴を行う過程や様々な人物、団体、公的権威筋の活動、新聞に現れた様々な記事などの結合として、形作られる。そして、様々な部分から1つの全体を作るがゆえ、人はそこに矛盾といわないまでもある限度までの異質さを見出すことになる」(Morin 1969 = 1973 : 96-97)。口裂け女のうわさの対抗神話は、「うわさは、精神障害・異形に対する偏見・差別である」というものである。対抗神話は、全ての人が無意識下に感じている社会の問題なのである。そのため、対抗神話は全ての人に担われるが、誰もはっきりとは言わない。そもそも、神話はかねてからあった偏見と結びつき、うわさとなるのだから、うわさしている本人達が、うわさが偏見・差別であることを意識することはない。そして、悪役を担わされている側は、自分達に対する差別を感じ、排除されていることに心を痛める。うわさがピークを迎えていたとき、各雑誌や新聞がうわさを取り上げた。各地のうわさの型が取り上げられれば、口裂け女という悪役を誰が担わされているのか、うわさをしていない人々も無意識に感じる。

対抗神話は、うわさの信憑性を叩くが、神話そのものを説明しない。対抗神話では、説明しきれない残留物があるため、違和感が生じる。

8 口裂け女のうわさの現在

冒頭でも述べたとおり、口裂け女のうわさは今でも脚光を浴び続けている。それは、まだ、うわさが終わっていないことを示している。2000年にあるテレビ局の子供向けアニメが口裂け女を扱う予定だったが、「口唇口蓋裂病」の子供を持つ親達の団体の抗議を受けてその回だけ放送中止になったことがある。「口が裂けたものを妖怪視する」ことが差別の助長に繋がるとしての抗議であった。これは、対抗神話の活動である。

対抗神話によって推し進められた議論や説明は、様々な個人や団体の活動を支えていく。そして、対抗神話の活動によって、様々な権威筋を動かし、うわさを抑止していくのである。そのため、対抗

神話の活動は、否定や非難の中にその根拠を求めようとする。どうにも捉えどころのないうわさに対して、形や構造、作者、目的を与えることによって、それと戦おうとするのである。オルレアンのうわさでは、反ユダヤ主義者が流した策略という対抗神話によって否定・非難された。反ユダヤ的であり、「非難されるべきものであるから、うわさは嘘である」と否定したのである。口裂け女のうわさの場合も、口が裂けたものを妖怪視するものであり、「非難されるべきものであるから、うわさは嘘である」、また、精神障害者を異常視するものであり、「非難されるべきものであるから、うわさは嘘である」と否定・非難される。そのため、対抗神話の活動は、うわさについてのうわさといえる。

しかし、このような対抗神話の活動は、社会の目をうわさの被害者そのものに向けさせ、差異を強調する。そのため、精神障害者の上に新たな神話、つまり、反・対抗神話が生み出された。うわさの事実は本当にあったのだとされたのである。反・対抗神話は、本来全く関係のなかった事物や人物に付着し、うわさを生んだ張本人とする。そして、絶えることのない論争を繰り広げさせるのである。

このように、対抗神話の活動はうわさを抑止するという目的は果たせても、反作用を生み、絶えることのない論争を繰り広げさせる。つまり、口裂け女のうわさが、30年近く経っても、なお、残り続けているのは、口裂け女の神話そのものから離れて、神話が付着した社会の問題を論争し続けているからである。

9 まとめ

口裂け女のうわさは、第5章で述べた母親説に沿うなら、母親の否定的な面の神話であった。「神話というものは、社会が分離したものを再び一緒にさせ、社会が禁じるものを実現させ、相互に矛盾したものを統一させるものなのだ」(1969 = 1973 : 60)。学業など様々なことに干渉する母親に対する反発心や恐怖心を現実の母親にぶつけることはできない。一方で依存している自分がいるからである。上述のモランの表現を借りるなら、次のように言い換えられる。子供達の母親に対す

る反発を社会、そして自分自身が禁じているため、それを「口裂け女」という神話で実現したのである。

また、母親達側から説明すると、子供の全てに干渉したいが、それは社会と子供が許さない。これも、上述のモランの表現を借りるなら、次のように言い換えられる。母親達の子供に関わる望みを社会、子供、そして自分自身が禁じているため、それを「口裂け女」という神話で実現させたのである。

また、口裂け女のうわさが流れていた時代は、大人も子供も窮屈な、追い詰められた状況にいた。そして、劇的に変化していく生活慣習に人の心はついていけなかった。この社会情勢もまた、うわさを全国的に広めた要因であろう。

人は恐怖、不安、疑心、怒りなどという感情を押さえつけて生きてはいけない。そのような感情を押さえつけて生きていけば、どこかで不適応を起こすだろう。それを無意識的に象徴となるものに置き換えて他人に話して発散させ、他人と感情を共有することで浄化させるのである。そうすることで自分の心や生活を守った。

このような神話の実現されるためには、現実の場所や人物に付着しなければならない。誰が、何のためにこのようなことをするのか。その説明として、口裂け女は、精神を病んだ女性とされた。これは、かねてからあった精神病に対する偏見によるものと考えられる。人々は精神病という自分達との違いから精神障害者に口裂け女という悪役を担わせたのである。自分達とは一見すると何も変わらないが、精神病という病を抱えている。第4章で述べたとおり、神話はうわさとなるとき、潜在的な偏見と結びつく。そして、語っている本人達は、そのことに気づかない。

神話の悪役の担い手になるのは人物の場合、社会的マイノリティである。この社会的マイノリティは元々あったのではない。うわさする者によって、作り出されるのである。そのため、うわさは、時として特定の他者を排除する。自分の心や生活を守る代わりに他者を傷つけてしまっていることを忘れてはいけない。

モランのうわさに対する考え方を訳者・杉山光信(1969 = 1973 : 382)が、解説で次のように述

べている。「うわさは危機のあらわれであるよりも、ある社会的思考の表明であり、それを通じて、現代の都市というようなひとつの社会の機能・運行の様態をよく示すものと、考えられていよう」。

つまり、神話がうわさとなるために付着した事物にその社会の思考が示されているのである。本来、人は一人ひとり違うものである。その一人ひとり異なる人間は、社会の中で差異によってグループ分けされる。性別、人種、宗教、学歴、年齢など、そのグループ分けされる指標の数は数え切れないほどある。つまり、いつ何時、自分が排除される側になるかわからないということである。それと同時に、いつ何時、自分が誰を排除してしまうかわからないということになる。そして、うわさをする人々が目を向けた差異にその社会の本当の問題がある。

うわさが絶対になくならないものである以上、一人ひとりがうわさとの付き合い方を考えて生きていくことが大切になるだろう。うわさとは、私達一人ひとりの問題なのである。

[注]

- (1) 『週刊朝日3-23号』（1979：35-36）に記載されていたものである。放送局までは、記載されていなかった。しかし、地元警察のため、ローカルテレビだと考えられる。また、その他のデータは、平泉悦郎（1979:16-18）と朝倉（1989：140）の調査結果による。
- (2) 79年当時の『週刊朝日6-29号』より引用。
- (3) 岐阜県加茂郡八百津町が発信源だとする説は、79年当時の『週刊朝日6-29号』に載っている。原型とされるお婆さんの話は、ここからの引用である。
- (4) うわさが広まっていた当時の『週間読売8-21号』に載っていた記事を朝倉（1989：133）が要約したものをさらに要約したものである。その記事によると他の雑誌やテレビ局などのメディアも取り上げたようなのだが、残念ながら他の記事は見つけることができなかった。
- (5) この点については、朝倉（1989：134）を参照されたい。
- (6) 「口唇口蓋裂病」は、上唇が縦に裂けた状態で生まれてくる病気であり、口裂け女とは完全

に異なるとされている（松山ひろし 2007：38 参照）。

- (7) 松山（2007：38）参照。
- (8) 佐藤健二（1989：269-270）によれば、以下のような様々なうわさが流れた。
「富士山に大爆発があった。今なお大噴火中である」「秩父連山が大噴火したらしい」「東京湾に猛烈な大津波が来る」「これまで官憲の圧迫に不満を持っていた大本教は、その教えの中で今回の大火災を予言していたけれども、今その実現を見た。彼らは密謀を企て、教徒数千人が上京してくる」「市ヶ谷刑務所の解放囚人は、山の手や郡部に隠れ潜んでいて、夜になるのを待って放火する計画らしい」。

これらのうわさから、「社会情報としてのうわさ＝流言」も、神話からの説明が可能ながわかる。そして、悪役を担っているのは特定の人物だけではない。震災によるショックとその後の平穏な被災生活。あんなにひどい目にあったのに、何事もなかったかのように過ぎていく日々に人々は矛盾を感じていた。この平穏な日々の中に何か恐ろしいことが潜んでいるのではないか。きっと、自分達を何か恐ろしいことが襲うに違いない。そのような神話が人々の無意識の中で生じてくる。この神話が様々なものに付着し、うわさになったのである。人物では「朝鮮人」「大本教の教徒」「刑務所の囚人」。場所では、「富士山」「秩父連山」「東京湾」。これらに神話が付着した理由は、かねてからあった偏見である。このことから、「おしゃべりとしてのうわさ＝ゴシップ」に関しても、神話からの説明が可能であると考えられる。

- (9) 佐藤（1989：269-273）参照。
- (10) 『岐阜日日新聞』（1979.1.26朝刊）参照。記事の中で、記者は自分の娘（小学1年生）に口裂け女について聞いている。その返答の中に「口裂け女は午前1時ごろに現れるから、そのころは寝ている」とある。
- (11) 自殺の理由は、他にもありえるが、学業問題によるものが最も多いというデータ（昭和54（1979）年警察白書）があるため、ここでは、学業問題を取り上げた。
- (12) 『完全版朝日クロニクル20世紀 第7巻 列島

改造の夢と挫折 昭和46年 - 昭和55年』(朝日新聞社編 2000 : 1977-12) と『昭和 二万日の全記録 第16巻 日本株式会社の素顔』(講談社編 1990 : 188) 参照。

- (13) 「触法少年 | 新語辞書」(日本データベース開発) 参照。
- (14) この点に関しては、『昭和 二万日の全記録 第16巻 日本株式会社の素顔』(講談社編1990 : 179) を参照。
- (15) 「サラリーマン金融」の略。無担保、無保証で借りやすい反面、超高利(最高は年利109.5%だったが、83年から引き下げられていった)のため、雪だるま式に借金が膨らみ、返済に困る人が続出した(講談社編 1990 : 233参照)。
- (16) 『昭和 二万日の全記録 第16巻 日本株式会社の素顔』(講談社編 1990 : 222, 233) 参照。
- (17) オルレアンのうわさの日本バージョンの分析は、池田香代子(1994 : 181-192)の分析を要約したものである。消えた代議士の娘の例話は、ここからの引用である。
- (18) 口裂け女の各地で異なる細部は、常光徹(1993 : 38-41), 朝倉(1989 : 135-138), 水口(1992 : 60-62)の調査結果をまとめたものである。

[文献]

- 朝日新聞社編, 2000, 『[完全版] 朝日クロニクル 20世紀 第7巻 列島改造の夢と挫折 昭和46年 - 昭和55年』朝日新聞社, 1976-35, 1977-12, 1978-35.
- 朝倉喬司, 1989, 「あの「口裂け女」の棲み家を岐阜山中に見た!」(『別冊宝島92 うわさの本』JICC出版局, 132-149).
- 平泉悦郎, 1979, 「全国の小中学生を恐れさせる「口裂け女」風説の奇々怪々」(『週刊朝日』6-29号)朝日新聞社, 16-20).
- 池田香代子, 1994, 「日本だるま」(池田香代子他編・著, 『ピアスの白い糸 日本の現代伝説』白水社, 181-192).
- 管賀江留郎, 2010, 「少年犯罪統計データ」(<http://kangaeru.s59.xrea.com/toukei.html>, 2010.01.08).
- 川上善郎, 1997a, 『セクション社会心理学 - 16 うわさが走る - 情報伝播の社会心理 -』サイエンス社, 1-86.
- 川上善郎, 1997b, 「序章 うわさの噂 パラエティに富むうわさ」(川上善郎・佐藤達哉・松田美佐, 『うわさの謎』日本実業出版社, 11-60). 警察庁, 1979, 「昭和54年 警察白書」(<http://www.npa.go.jp/hakusyo/s54/s540200.html>, 2010.01.08).
- 講談社編, 1990, 『昭和 二万日の全記録 第16巻 日本株式会社の素顔』講談社, 179, 188, 222, 233.
- 松山ひろし, 2007, 「戦後最大の都市伝説! 口裂け女の本当の正体とは」(実話GON! ナックルズ編集部編, 『ナックルズBOOKS04 恐怖の都市伝説』ミリオン出版, 29-38).
- 水口禮治, 1992, 「第3章 流言の心理」(『大衆』の社会心理学 非組織社会の人間行動) プレイン出版, 49-63).
- 文部科学省, 1979, 「児童生徒の自殺防止について」(http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/t19790224001/t19790224001.html, 2010.01.08).
- 文部科学省, 2004, 「生徒指導上の諸問題の現状について(概要) [2. 自殺]」(http://202.232.86.81/b_menu/houdou/16/12/04121601/002.htm, 2010.01.08).
- Morin, Edgar, [1969] 1970, *La rumeur d'orleans, Nouvelle edition*, Paris : Ed. du Seuil. (= 杉山光信訳, 1997, 『オルレアンのうわさ(新装第2版)』みすず書房.)
- 日本データベース開発, 2006, 「触法少年 | 新語辞書」(http://www.kw-guide.jp/newwords/post_377/, 2010.01.08).
- 西沢晃彦, 2000, 「第8章 郊外という迷宮」(町田敬志 西沢晃彦, 『都市の社会学 社会が私たちをあらわすとき』有斐閣アルマ, 203-236).
- Rosnow, Ralph.L. and Gary.Alan.Fine, 1976, *RUMOR AND GOSSIP The Social Psychology of Hearsay*, New York : Elsevier. (= 南博訳, 『うわさの心理学 流言からゴシップまで』岩波書店, 1982, 85-88.)
- 佐藤健二, 1989, 「「うわさ話」の思想史」(『別冊

- 宝島92 『うわさの本』 JICC出版局, 261-274).
- 常光徹, 1993, 『学校の怪談 口承文芸の展開と諸相』 ミネルヴァ書房, 38-43.
- ヨーコ, 2008, 「ついに見つけたー! 「口裂け女」はここにいる」(実話ナックルズ編集部編, 『ナックルズBOOKS09 こわい話』 ミリオン出版, 112-121)
- 読売新聞大阪社会部編, 1979, 「口裂け女騒動記 ほんまおなごはおとろしい」(『週間読売8-21号』 読売新聞社, 137).